

< 研究成果の紹介 >

カキの挿し木繁殖について～わい性台木を用いた事例より～

農業研究部園芸グループ

1. 成果の内容

カキの挿し木繁殖は難しいとされていましたが、近年、次のような方法により高い発根率が得られるとのことが報告されています。

- ① ひこばえ（不定芽由来の新梢）を利用する。
- ② 発根促進剤を処理する（IBA25ppm24時間浸漬または3,000ppm5秒浸漬）。
- ③ 挿し床は、鹿沼土とピートモス（1:1、v/v）とし、寒冷紗で覆ったミスト室内で管理する。
- ④ 6月下旬までに挿し木する（時期が遅いと発根率が低くなる）。

1980年代には組織培養による繁殖が試みられ、一定の成果が上がっていますが、コスト等の点から実用には至っておらず、挿し木のような簡易な方法は有効な技術と考えられます。

今回この方法を用いて、農業研究部が選抜したわい性台木の挿し木繁殖の可能性を検討しました。

不定芽由来の新梢を材料として、2000年6月6日、6月16日および7月7日に発根促進剤（IBA25ppm）に24時間浸漬した後に挿し木しました。その結果、挿し木時期が早いほど発根率が高く、発根率は早い時期から順に59.3%、33.3%、10.5%で（図1）、写真1のような発根個体を得ることができました。

また、今回挿し木した場所は写真2に示すように、支柱で枠を組み、その上に寒冷紗をかけ、湿度保持のための散水装置は、水道から引いたパイプに動噴用噴口を取り付けるという、極めて簡易な施設です。

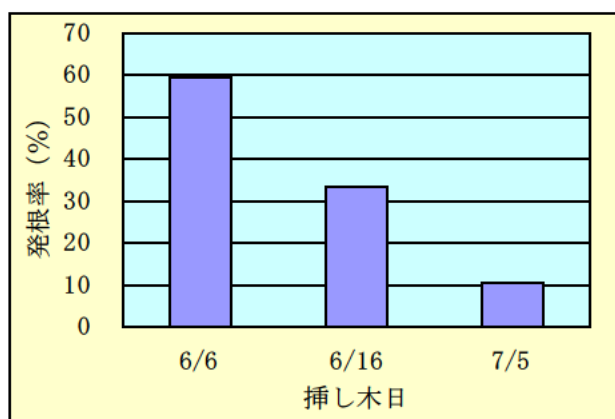


図1 挿し木日の違いによる発根率の差

2. 技術の適用効果と適用範囲

- 1) 他の種類で検討した事例も含めて、多くの品種や系統で利用可能な技術です。
- 2) 台木の育成を自分で行えますので、必要な穂品種を接ぎ木することにより、苗木を購入する必要がなくなります。
- 3) 遺伝的に同じ苗なので、生育の揃いが期待できます。

3. 普及・利用上の問題点

- 1) 定芽由来の新梢では発根した個体が得られなかったため、不定芽由来の新梢を用いる必要があります。
- 2) 湿度保持が管理上重要ですので、葉が湿った状態を保つことを目標に湿度管理をして下さい。今回はかん水も兼ね、水道圧で1分間隔で5秒間散水しました。

（現企画調整グループ 伊藤 寿）



写真1 発根状況



写真2 挿し木場所の状況